

友へ！ 反日武装闘争の前進に向けて！

(1) 78・9・18付

友へ！

☆ “身体を張った闘い”ということに関して再び書きます。我々は、身体を張るか否かを踏み絵的な基準としているというわけではありません。しかし、闘いとは必然的に身体を張ることになるのだし、これを恐れていては闘いの前進はあり得ないと思います。M君が暴行された例を出すまでもなく、特に獄中では、正当な主張すらも身体を張らずにはいられません。多くの政治囚と言われている人たちは、看守どもとの衝突、その後の奴らからの報復を恐れて、正当な主張をしないで沈黙するか、コトバと文字のみの世界に逃避しています。目の前の不正に目をつぶって、いくら

“立派”なことを言ったり、書いたりしてもウソであるし、根本的に間違いだと思っています。

獄外で武装闘争を担ってきた者、獄中で「主義者」(仁平さんの表現ですが)に成長した者は、獄中でも武装闘争路線を堅持し、実践的に追求することは当然のことであると思います。獄外の戦闘と呼応した獄中武装叛乱は、革命状勢を大きく前進させます(旧南ベトナム・中南米各地・USA帝内でのブラック・パンサー党の戦い)。日帝監獄下、我々は分断孤立化を強いられています。監獄内中枢(保安課)には、ピストルをはじめとした武器があるので。泉水さんの獄中決起から多くのものを学んだ我々は、獄中武装叛乱の具体性を創り出していく任務がある、と俺は考えています。

具体的な闘う事実行為を前提とする、あるいはそれと一体となったコトバ以外はマヤカシであるのと同じ意味で、戦闘性・攻撃性を欠いた反日思想もマヤカシです。なぜなら、反日思想は、我々を生き生きとした戦闘に駆りたててからです。従って、「身体を張るか否か」が踏み絵的な基準ではありませんが、反日の立場を堅持し、反日武装闘争を前進させよう、発展させよう、としている者は、「身体を張った闘い」を展開している、と言えらると思います。しかし、反日を語り、文字にしなから、目の前の不正に目をつむり、闘いを回避せんとする者は、その者の主張する反日の質を問われると思います。だから果敢な「身体を張った闘い」は、その者の反日性を検証する基準の一部にはなり得るはずで、俺はこのように考えています。

ではまた、健闘を！

(2) 78・9・30付

友へ！

☆ 9・17付の手紙は9・22に落手しました。この中であなたは、我々の「KT作戦(註1)」をこそ継続すべし」という主張に対して疑問を持っているようですね。「敵に与つては大した打撃でもないのだと思うのです」という部分また、我々が「闇の土ぐも」・「大地の豚」・「タスマニア1876」の同志たちの戦いを公然と支持表明していな

いことへの批判から、あなたには、我々の「KT作戦をこそ継続すべし」という主張がセクト主義として思われているのかもしれない。

我々は三部隊の戦いであるからという理由で、「KT作戦をこそ継続すべし」と主張しているのではありません。反日兵士、反日勢力にとつて問われているのはKT作戦の質であり、その方向であり、その深化であると確信しているからです。

どうもあなたは、我々の主張している、「中枢へ迫る」ということを理解していないようです。我々が、KT作戦は「日帝中枢を攻撃した」、「間組中枢を攻撃した」と言う時、それは単に間組の内部深くに入り込み、中枢機能を攻撃したこと、そして間組という日帝経済の中枢部分を攻撃したということを行っているのではありません。

間組は当時「マレーシア」で何をやってたのか？ 間組のテメンゴールダム建設は、「マレーシア」政府の工業化政策の目玉事業であり、「マレーシア」政府の延命を支える経済的、政治的、そして軍事的柱でした。すなわち、それはマラヤ解放勢力、マラヤ人民に敵対するものであった訳です。この敵対は、テメンゴールダム地域がマラヤ解放武装勢力の根拠地の一つであったことから、積極的な敵対・攻撃以外の何物でもありませんでした。

それ故、我々が間組のテメンゴールダム建設を許すこと

は、マラヤ人民、マラヤ解放武装勢力に対する直接的な侵略加担であり、具体的な抑圧への参加であり、搾取の強化であったのです。である以上、反日兵士は、何を、おいても間組を攻撃し、テメンゴールダム建設を許してはならぬ任務を負っていたのです。違うだろうか？

間組に対する攻撃、しかもカンパニアではなく、セン滅戦の遂行、執拗な連続攻撃は間組の歴史的な反革命犯罪性を撃ち、マラヤ人民に対する「皇」軍・日本人植民者の侵略、植民地支配に対する自己批判実践という側面とともに、否、それ以上のウェイトを占めて、現在のな侵略を許さないという日帝本国人の真の連帯のあり様を示した、と思います。この意味でKT作戦は、三菱重工・三井物産・帝人中央研究所・大成建設・鹿島建設に対する攻撃の質を何歩も押し進めたと思います。そして、KT作戦は軍事的にもはば一〇〇%成功したのです。

我々が言う中枢への攻撃とは、軍事的・政治的・思想的な観点からのことですから、単に物質的なダメージを大きく与えた、というようにはとらえて欲しくありません。

また、我々は決してKT作戦一度きりで「自己満足」している訳ではありません。あなたは、KT作戦が敵にとつては大したダメージではない、と書いていますが、一度きりではそうでしょう、確かに。だから、何度も、繰り返し執拗にやる必要があるのです。積み重ねること、テメンゴ

ールダム建設から撤退させるまで間組を攻撃する必要があることを我々は考えていたのです。もし、あなたが書いてある意味が、個別間組がダメージを受けても日帝総体はビクともしない、という意味であるならば、それは間違いだと思えます。敵を各個撃破していくこと、その積み重ねが勝利をもたらすのではないのでしょうか？ この確実に敵を粉砕していく過程で、一方で敵の活動の停滞・混乱を引きずり出し、一方で味方の拡大・強化を実現していくのではないのでしょうか？ 中枢セン滅戦を確実に遂行していくことこそ、反日武装闘争の重要な前進に結びつく、と我々は考えています。(なお、我々を、ウラム骨髓に運んでいるので極刑に処して欲しいと、検察官の尋問に泣きを入れた間組総務部長八田昌夫は、館物・施設の被害が一五億円であり、情報等の損失を含めるとその額はとても計り知れないと「証言」したことを伝えておきます。)

日帝本国人がオノレの歴史的、現在のな反革命性を自己否定していくのは、こうした日帝企業・機関などの侵略活動をも具体的に阻止する方向、被植民地人民との真の連帯行動を通してこそ遂行されねばならないと思います。

さきほどから、発信時間だ、と看守がガタガタ言っているのて今日はこれにて。

健闘を！

(註1) KT作戦とは75・2・28に東アジア反日武装

戦線「さそり」、「狼」、「大地の牙」の三部隊が間組本社海外事業本部、コンピューター室、大宮工場を同時爆破した木曾谷・テメンゴール作戦の頭文字をとって略したもの。

(3) 78・10・20付

友へ！

☆ D作戦(註2)の戦術的失敗に関して。

あなたは、我々がD作戦を失敗と総括することを批判していますが、俺はあなたにもっと具体的に、焦点を詰めて考えて欲しいと思います。

あなたは、我々の総括パンフ(廃刊号)下巻のN同志の「メモ」をどのように読みましたか？ 俺はこの「メモ」内容をパンフが完成する少し前に知ったため、俺のD作戦の総括は、この「メモ」からは何の影響も受けていません。つまり、この「メモ」と俺のD作戦の総括は、時間的に約二年間の隔たりがあつて、俺とN同志は意見の交流をすることなく、別個にD作戦の総括を行なっている訳です。しかし、お互いの問題意識は同じところにあります。(勿論彼のは「メモ」であり、もっと豊富化されねばならないのですが。)

「たとえ帝国主義者であろうと最初に敵として、どうしても殺さなければならなかった人間ではなかった」、「彼

ら(最初に、しかも確実に処刑しなければならぬ帝国主義者)に対する闘いを通じて、帝国主義者が日帝打倒の闘いに立ち上がるのであり、三菱における死者がその可能性がなかったと断言することはできない」、「場所および方法のあまさ、分析のなさ」云々。俺は、彼がメモしたこれらの部分に、D作戦の戦術的失敗に関しての核心があると思います。

「狼」は、日帝本国人が総体として歴史的、現在の帝国主義者であり、思想的に全部否定しなければならぬと考えていたのですが、思想的に全部否定することと、物理的・実体的にセン滅することをアイマイにしていました。その結果、まず殺らねばならない敵と、そうではない者との区別を鮮明にしていませんでした。この点にこそ、D作戦の戦術的失敗を招来した根拠があつたことを、彼の「メモ」は明らかにしています。

日帝本国人は総体として歴史的、現在の反革命的存在であり、客観的存在形態として帝国主義的寄生虫であり、抑圧者ですが、総体として帝国主義者ではありません。帝国主義者は、主体的であり、意志的であり、能動的である帝国主義的な思想的、政治的、経済的立場に立つ者を規定する概念です。従つて、もしも日帝本国人総体が帝国主義者であると規定するならば、帝国主義者は即座にセン滅すべき敵ですから、日帝本国人の「みな殺し」路線が導き出

されてしまいます。日帝本国人総体の「みな殺し」路線は明らかに間違いです。つまり、「狼」は、帝国主義規定・人民規定を厳密にやりきれず、アイマイであつたために、D作戦の戦術的失敗を招来してしまつたのです。

反日闘争の主体は誰か？ 総体として歴史的、現在の反革命的存在である日帝本国人ではないだろうか？ では如何にして反革命的存在である日帝本国人を革命主体へと組織していくことができるのだろうか？

このことが、我々の、反日武装闘争の主要な課題であり、D作戦の総括は、この課題との連関で具体的にやらねばならないと思います。

D作戦は、目的意識的な本格的な反日武装闘争として、まず殺らねばならない敵に対して的確に攻撃し、敵を動揺・消耗させ、味方となり得る人民に力を与えたであろうか？ 反日思想、反日武装闘争を拡大し、深化し、定着させるものとしての「正」の攻撃性をつき出し得たであろうか？

これらの点を、政治的・軍事的観点から冷静に分析し、総括しなければなりません。特に軍事的観点からの総括の場合、事実を、結果を、ありのままに見つめなければなりません。誇大な評価も、過小な評価も排除し、主観主義を克服して客観的に事実を総括しなければなりません。この観点からすれば、D作戦の結果の死傷者は、まぎれもなく通行行人に他ならなかったことを確認しなければならないと思います。

彼らは確かに日帝本国人として反革命的存在でしたが、決して即座にセン滅すべき敵ではなかったし、獲得すべき対象者を多く含んでいました。彼らの中には、三菱重工の社員や他の侵略企業の社員ばかりでなく、トラックの運転手があり、男の小学生・職業訓練校生・調理師見習などがあったのです。

こうした結果を生んだことは、「狼」が殺らねばならない敵を如何にして撃ち、その撃つことによつて味方を拡大していくという点に関してアイマイであつたこと、すなわち戦術的に失敗した結果であると、総括せざるを得ないのです。反日武装闘争の、目的意識的で、本格的な開始期であつただけに、特に失敗であつたと思います。

あなたの10・6付手紙に書かれていた、「革命戦争は人民戦争であり、反日闘争―戦線の拡大なくしては勝利はない。」というのは、その通りであると思います。しからは、人民戦争を担う人民とはどの部分なのか？ それを明確に規定し、その上で如何にしてその人民を反日武装闘争に動員していくのかを明らかにする必要があると思います。この点をアイマイにしていると、「人民戦争」、「戦線の拡大」「武装闘争の大衆化」なども、単なるコトバだけに終つてしまいます。D作戦を担つた「狼」は、この点をアイマイにしていたのです。

D作戦は、主観的には反日武装闘争の事実行為による戦闘

宣言であり、度し難く微温的な日帝本国人左翼を含む日帝本国人総体に態度決定を迫る戦いでした。しかし、戦術的失敗によって殺傷すべきではない通行人多数を殺傷してしまつたことよつて反日の大義を希薄にし、敵の反テロ・反爆弾の反革命宣伝を許してしまいました。それ故、D作戦が特に最初の本格的な反日武装闘争であつただけに、客観的には以後の反日武装闘争の発展を妨げる多くのマイナス面を出してしまつたのです。このマイナス面を克服し、反日武装闘争を進展させていったのは、三井物産爆破攻撃以降の三部隊の連続的な戦いであり、特にKT作戦でした。未知の同志たちによる「北海道」警察警備部に対する攻撃も、三部隊の一連の戦いの延長上にあり、さらに三部隊八名の被逮捕そして七名の自白という敗北を克服するものとして戦われたのである、と思います。

D作戦を、軍事的政治的に、反日武装闘争を拡大させ、発展させていく観点から、より冷静に具体的に分析し、総括していかなければならないと考えています。

☆次に、反日兵士への決起の契機に関して書きます。

あなたは、反日闘争の深化と拡大のために、個々の闘いに対する批判や意義の確認は間違いであると書いていますか、そうであらうか？

あなたの考えとは逆に、俺は個々の戦いを批判し、意義を確認していくこと（言うまでもないことです）が、オノレ

す。

あなたは、日帝本国人が反日兵士へと成長・決起していく契機・条件をどのように考えていますか？ 日帝本国人は、絶対に自然成長的には反日兵士へと成長しません。それ故、我々は反日勢力の拡大、反日兵士の獲得を漠然と観念的に遂行することはできません。自然成長性を期待するのではなく、反日兵士、反日武装闘争への成長・決起の契機・条件を十分に分析し、その上で目的意識的に工作していかねばならないと思います。

俺は、反日兵士へと成長する条件の最大のものは、反日理論を理解し納得すること以上に、先ず日帝の侵略植民地支配の反革命史と現在の新植民地主義侵略に対して怒り、被植民地人民の戦いの道理と正義に対しては共感し、喜ぶという戦闘的でナイーヴな感性である、と思つています。かつて京大バルチザンの滝田修は、バルチザン戦士の条件を、「したたかで、ういいういしくて、ナイーヴで云々」と五つくらい挙げていましたが、俺は反日兵士の条件も最も基本的なところでは同じであると思います。しかし、それだけでは不十分で、その上に現在の日帝の新植民地主義侵略は許せないという怒り、歴史的・現在の反革命的存在である日帝本国人であるオノレを自己否定しなくてはならないという責任感が必要であり、そうした感性、思想性を土台として、日帝を根底から打倒し尽し、世界革命の勝利

を安全地帯に置いてオノレは戦わないことを前提にして、アレコレ言つたり書いたりする評論家は論外ですが）こそが、反日闘争を深化させ、拡大させていくことができるのだと思います。D作戦の総括においてもそうですが、戦いを現実的、具体的に分析し、総括して、批判すべき点ははつきりと批判すること、そして次の確な戦いを準備し、実行していくことよつて、反日勢力は拡大し、新たな反日兵士が誕生してくるのであると思います。その意味で、現在の停滞・沈黙は全く痛いことです。未知の反日兵士たちが現在の閉塞状況を突き破るよう奮起することを期待するとともに、獄中部隊もさらに頑張らねばならないと思います。

我々が、「大地の豚」や「闇の土ぐも」、「タスマニヤ1876」の同志たちの反日武装闘争を公然と無条件に全面支持していかないのは、我々は彼らを公然と批判するようなこともしていないのですが、現日帝の政治・経済・軍事の中核に対するセン滅戦ではなく、神社仏閣への攻撃という彼らの観念的カンパニア的傾向を、真に物質力をもつた反日武装闘争として、正しい方向に発展させ、深化させ、拡大させていくために、と考えたからです。しかし、そのためには矢張り同志的に批判し、その上で、反日武装闘争という積極面、肯定面をもつと公然と支持すべきであつたと思つています。この点で消極的すぎたことを反省していま

を導く反日理論に確信を持つ、確固とした反日兵士が誕生するのだと思います。

やるべき時には一切のチュウチョをせずに断乎としてやること、そして、ういいういしいナイーヴな感性をもつて必ず敵をぶつ倒すまで執拗にやること、が必要なのだと思います。高邁な理論が必要ではない訳です。ゴチャゴチャと書きまかりを並べ立てたり、戦う必要性を〇〇回も二〇〇回も繰り返すことではなく、先ず実際に歩を進めること、それが重要なことです。確かに勝利し抜いていくためには、理論的に冷静な分析力、判断力が必要ですが、それは具体的な実践を前提にすること、それを欠いた理論などは糞の役にも立ちません。感性的な鋭さ（ここで言う「感性」とは、確立するものとしての原始共産制的価値観・世界観から発動されるもの、ということになると思いますが）こそが、反日兵士の最も基本的で重要な条件であり、そしてその上で、武装闘争を自らが担うという固い決意であると思います。感性的に鋭いということは、不正に対する怒りを非妥協的に堅持し続け、道理・正義を追求し続けるということですから、自らが武器を手にして戦うことを当然とする訳ですが、歴史的に正義に向かう（革命に向かう）武器から「疎外」され続けてきた日帝本国人（反革命侵略のための武器は手にしたことがあるのですが）は、権力と戦うために武器を手にするに一大決心が必要なの

で、段階を踏んで考えてみた訳です。

反日を主張せず、また反日思想を理解していない人々であつても、日帝を打倒せんとする戦闘魂が横溢し、具体的な武装闘争実践に入っているか、あるいは入ろうとしている人々は、未来の潜在的な反日兵士なのだ、と俺は思っています。問題は、こうした潜在的な反日兵士を、如何にして確固とした反日兵士へと組織し、反日武装闘争を活発化させるか、ということにあるのです。

なお、こうした潜在的な反日兵士とは逆に、反日をコトバで語るだけの者がいます。かつてある雑誌に反日理論を展開していた男がいましたが、コトバを吐いただけで自らは決して起ち上がりませんでした。(残念ながら、今後も居眠りを続けるでしょう。) また、共産同戦旗派の中の一派は、機関紙戦旗で、日帝本国人の歴史的犯罪性・侵略性を語り、「血債の思想」でこれを克服すると主張しています。彼らが、この「血債の思想」という方向性をもつとすると深化し、誠実に考え抜くならば、反日思想に必然的に達着するのですが、彼らはオノレが加害者であつた(ある)ことを確認するだけの学者グループや、小市民の自己否定運動であるかつてのベ平連の一ミリ程左側に位置することに止つてしまつています。結局は日和見主義を脱しきれない訳です。誠実に考え抜くならば必ず達着する反日思想が要求する反日武装闘争実践を拒否する日和見主義と、従来

を促進していくのです。

俺の以上のような考えに対して、あなたは「これは反日帝闘争であつて、反日闘争ではない」と主張するかもしれませんが。しかし、我々が打倒し尽さねばならないのは世界帝国主義の中枢を占める日帝であり、我々はその戦いを反日思想に基く反日武装闘争によって推進し、またその戦いの過程において反日思想を普遍化し、強化し、深化していくのです。漠と対象、観念世界を攻撃することはできないということを押さえないと思います。日帝本国人総体の歴史的・現在の犯罪者性、侵略者性、寄生虫性に対して、それを総体として実体的に攻撃するというのではなくして、それを思想的に全部否定していくという思想的内圧を、日帝中枢への攻撃のバネにすべきなのです。そして、戦いの活発化の中で、日帝本国人の一人一人に、オノレの反革命性への対決を迫っていくのではないのでしょうか?

つまり、オノレを意識的・主体的な帝国主義者へと純化させて反日武装闘争に正面から敵対するのか、それとも自己否定実践として反日武装闘争に合流するのかを鮮明にしていくのだと思います。

以上、D作戦の総括との関連で書きました。

☆ あなたはKT作戦をプロパガンダだと書いています。天皇ヒロヒト爆殺にくらべて日帝に打撃を与えていないという事です、これに関して少しあなたの考えを批判し

のマルクス・レーニン主義を批判できない保守主義が、彼らをして口先だけで「血債の思想」を主張させているのだと思います。これらは理論的に反日を主張し、あるいは反日思想の必然性に気づくとは口に立ちながら、反日兵士・反日武装闘争に成長・決起し得ない例です。

俺は、以前獄闘のことを書いた手紙で、反日闘争は戦闘的でなければならぬし、また反日思想は我々を戦いに駆りたててくれるのだと書いたと思います。このことは当然にも獄闘に限定されることではない訳だから、たとえ現在は一国主義派であろうとも、その人たちが武装闘争を展開する(しようとする)決意であるならば、反日兵士として強力にオルグする必要があると思います。武装闘争に決起する決意とは、自然発生的・現象的にはオノレの日帝本国人としての既得権益を放棄する自己犠牲を要求されることになる訳であるから、その自己犠牲の決意を目的意識的に反日の方向に発展させていくように工作するのです。我々のこうした潜在的な反日兵士、反日勢力に対する物質力をもつた働きかけは、我々の確かな反日武装闘争の実践以外にはなく、そして更に、それは象徴主義的武装闘争ではなく、日帝の物的・人的な政治・経済・軍事中枢に対する確かなセン滅戦であると思います。中枢セン滅戦こそが、潜在的な反日兵士を確固とした反日兵士・反日武装闘争へ成長・決起、すなわち日帝を根底から打倒し尽す革命主体の形成

ます。

日帝に対する打撃の大きさの比較で言うならば、KT作戦よりも天皇ヒロヒト爆殺の方が大きいかもしれません。

しかし、KT作戦は、マラー解放武装勢力との呼応という意味において、マラーでの反日・反間組武装解放闘争が発する緊急の戦闘指示(日帝本国人に対するつきつけ)に応えるという意味において、それは決してプロパガンダ闘争ではないと思います。反日武装闘争は、日帝本国人の枠内においてではなく、日帝本国内外の戦いと連関の中で理解し、また追求されねばならないと思います。あなたがKT作戦をプロパガンダ闘争だと言ひ、KT作戦は日帝に対して大した打撃を与えなかったと書くのは、あなたの「総体攻撃」という概念からであろうと思います。「総体攻撃」という概念は、「日本人民総体が被植民地人民に対して有罪である」という反日思想を定着させるためのものだ、と俺は理解するのですが、しかし、漠然としていて観念的です。以前にも書きましたが、我々は漠とした敵に対して実体的な攻撃はできない訳です。「日帝」という敵の規定にしてもそうです。ただ「日帝と戦う」とか「日帝を撃つ」と言つても、それは一般的すぎて具体性がありません。帝国主義と云うのは、政治的、経済的、軍事的、文化的な構造物の総称である訳ですから、帝国主義を打倒していくためには、その打倒戦略を具体化し、プログラムを画定していかなく

ではありません。あなたが主張する、「日本を撃つ」ということは、「日帝を撃つ」ということよりもさらに漠然としているのです。従って、俺は「総体攻撃」ということではなく、日帝の政治的、経済的、軍事的な中枢への攻撃、その一つ一つの戦闘の具体性が持つ波及力が反日思想をつき出していくのだと思います。

日帝中枢へ武装攻撃すること、日帝中枢に対して物質的ダメージを与えること、そしてそのことによって勝利していく実在感を大衆化して、反日兵士、反日勢力が誕生し、拡大していくのであると思います。それ故俺は、「闇の土ぐも」、「大地の豚」、「タスマニア1876」の同志たちが、東アジア反日武装戦線三部隊や「北海道」警察警備部を攻撃した同志たちの戦いを引き継ぎ、更におし拡げるものとして、日帝中枢セン滅戦を断乎として敢行するように望んでいるのです。

後半部分は若干舌足らずであるかもしれませんが、再度展開したいと考えています。

☆ 寒くなってきましたが、体操を十分にやったりして、いや何よりも、反日武装闘争の勝利に向けた確信をもって、寒さを吹き飛ばしていきましょう。

ではまた、健闘を！

(註2) D作戦とは、東アジア反日武装戦線「狼」部隊が、74・8・30の三菱重工爆破攻撃をダイアモンド作戦

と名づけたため、その頭文字をとって名付けたもの。

(4) 78・11・6付

友へ！

☆ あなたは我々のD作戦総括を批判しています。しかし、それは誤解に基づいた批判です。我々は、D作戦が、結果として「日本人皆殺し」路線であつたばかりでなく、その作戦の出發、過程において、「日本人皆殺し」路線が思想的に前提とされるようなアイマイさ、不十分さがあつたが故に失敗であつたと総括しているのです。

俺はあなたの中核概念こそがアイマイであると思います。☆ 日帝の中核に迫るべきだという我々の主張、そしてKT作戦の継続を、という我々の主張が、日帝本国人の変革の視点を弱める、とあなたは批判していますが、俺はそのようには考えません。再々度繰り返しますが、我々はKT作戦を自分たちが担ったが故にセクト主義的に強調しているのではありません。日帝中枢に対する武装攻撃であるKT作戦は、マラヤ解放武装勢力による日帝本国人に対する「戦闘指示」・「つきつけ」に応えた戦いです。日帝本国人総体に対するつきつけに、具体的に応えたものであり、我々が応えることによって、我々以外の他の日帝本国人に対して再度のつきつけを行なった戦いです。

KT作戦は、以上のような日帝本国人からの速やかな被

植民地人民の反日・反世界帝国主義の戦いへの呼応という意味において、それが日帝中枢への武装攻撃であつたということからではなく、それ以前の一連の戦い、そしてそれ以後の三部隊以外の戦いとも思想的、政治的に質を異にしていると思います。もちろん、KT作戦の質を継承し、より発展させるべきものとしての「異」ということです。

「タスマニア1876」の同志は、KT作戦の方向性をもって、アマゾン原住民の立場から戦いを組織しようとしたが、敵に実体的なダメージを与えることなく、カンパニア的に結果しました。しかし、こうした方向性を堅持し、更に深化させることを追求して、アマゾン原住民の立場からの戦闘を準備し、実行していくならば、日帝本国人に対するつきつけに力をもたせ、日帝本国人の変革を迫っていくことでしよう。

現在、中米エルサルバドルのFARNの戦闘（日帝合併企業インシエンカの代表を捕捉した戦い）によって、日帝本国人総体が、帝国主義本国人としての存在を問われている。我々はFARNの戦闘に応え、日帝中枢を武装攻撃することで被植民地人民と呼応しなければなりません。そして、こうした呼応する戦いが速やかに組織される時、日帝本国人の変革を強く促進していくことになると思います。

☆ 日帝本国人の吐くコトバに關して。

俺はコトバを全部否定している訳ではありません。もし

全部否定しているならば、総括パンフの作製もアップीलもせず、一切沈黙しています。文書活動はそれなりに意味があります。政治工作には不可欠であることを、俺は十分に認識しています。

俺が文書活動を批判するのは、日帝本国人として被植民地人民の抑圧と搾取の上に立つ、「自由」に保障されたコトバの軽さ故なのです。日帝本国では、革命・共産主義・武装闘争……というコトバが商品として流通します。「革命」が、一般の書店の本棚に、大学のキャンパスに、映画やテレビに……氾濫しています。新左翼諸党派の機関紙を見ると、明日にも革命が勝利するかの如き印象を受けます。総じて、日帝本国ではコトバは軽くなり、コトバを発する者の存在が賭けられていないのです。日帝本国では、革命に關するコトバや觀念の世界を弄んで、商品化して生活していけるのです。それ故、俺は日帝本国人の吐くコトバは、そのままでは被植民地人民に信用されることがないと思います。彼らが信用するのは、我々の戦う事実行為を確認し、そして事実行為を前提としたコトバであると思います。俺が日帝本国人の吐くコトバ、文書活動を問題にするのはこういうことなのです。

コトバ、觀念の洪水に麻痺している日帝本国人は、戦う事実行為を前提として、はじめて真に力のあるコトバを発することができ、確信をもって他に働きかけることができ

るのです。

ではまた、健闘を。

(5) 78・12・1付

友へ！

☆ エルサルバドルのFARNからの「戦闘指示」に関して。

俺は毎日新聞と日本読書新聞で、彼らの宣言文を読みました。その中で彼らは確かに、あなたが書いてるように、帝国主義者と多国籍企業に共に抑圧・搾取されている存在としての日本人民に連帯を呼び掛けています。この、「共に抑圧・搾取されている存在」という部分は明らかに間違っていますが、我々日帝本国人は、決して文面そのままに受け止めるべきではない、と思います。我々は彼らの呼び掛けに「連帯」の意味を考え抜かねばならないと思います。俺は、彼らの主張する「連帯」を、日帝本国人は、世界帝国主義の中核を占める日帝、そしてその実体というべき多国籍企業・侵略企業中核を攻撃せよ、という彼らの戦闘指示ではないだろうか、と考えています。「お前たちは、被植民地人民の抑圧と搾取の上にヌクヌクとした生活を送っていて何をやっているのか。速やかに日帝中核を撃て。」という彼らの怒りをもったつきつけであつたと思います。FARNの宣言文、とりわけ、彼らの主張する「連帯」

あなたは、「死傷者を出したから失敗と総括しているのは間違いだ」と批判しているのですが、そうではないのです。俺の総括パンフの中でもこの点が十分に書ききれないことを最近になって自覚しているのですが、死傷者の内実が問題なのです。D作戦の死傷者は、最優先的に殺傷すべき敵（帝国主義者）であつたのか？ それとも、獲得すべき人民、将来ともに戦う人民が多く含まれていたのではなかったか？ ということを問題にしているのです。一般的に死傷者を出したからその作戦は失敗だ、としたのでは武装闘争は担えません。そのような「総括」（総括というよりは清算とでも言うべきですが）をしてしまえば、T君のように、もう爆弾を投げるのは嫌だ、ということになってしまふでしょう。俺は爆弾も投げたいし、仕掛けたいし、銃も撃ちたいと思います。そして、爆弾を投げ、仕掛け、銃を撃つ対象は、最優先的に殺るべき帝国主義者であり、侵略企業、機関中核であつて、決して獲得すべき人民が対象であつては（結果的にも最大限配慮して）ならないと考えています。こうした殺るべき敵は確実に殺り、獲得すべき人民には被害を与えないという戦いの着実な展開によって、我々の戦いⅡ反日武装闘争は前進していくのです。確実に戦線を拡大し、確実に反日の人民の海を形成していくのです。D作戦は、断乎とした反日武装闘争の開始であつたのですが、そのプラス性よりもマイナス性

を、日帝本国人である我々に対する戦闘指示として受け止めること、この思想、感性こそが、真の国際主義として発動される反日思想であると思うのです。

☆ 再び、D作戦の総括に関して。

あなたはD作戦を正しく総括すべきだと書いています。どうも俺の手紙を読み違えているようです。俺はD作戦は、D作戦を担った部隊の思想的なアイマイさ、不十分性の結果として失敗であつたと書いたものであり、結果として不十分であつたなどとは書いていないはずですよ。作戦の発案とその準備過程においてアイマイさ、不十分性があつたが故に、結果としての失敗は必然であつたとさえ言えると思います。それ故、今現在の最大の課題は、思想的にアイマイであり、不十分であつたものは何なのかを具体的に分析し、それを確固としたものにすることなのです。もつとはつきりと書くならば、「狼」は、結合し、獲得すべき人民の分析と規定、戦線の拡大と敵の消耗という弁証法的観点に立つての敵の規定、つまり最優先的に攻撃すべき敵（帝国主義者）の分析と規定がアイマイであり、不十分であつたが故に、D作戦の失敗を結果してしまつた、と俺は総括している訳です。従つて、人民規定、帝国主義規定を確固としてやりきることが、D作戦の失敗を克服することである（真の克服とは実践的に検証されることです）から、分析と規定はその端緒ということですが）と考えているのです。

の方が大きかったです。それが反日武装闘争の開始の戦いであつただけに特にそうであつたのです。このことを確認したいと思います。

一九四四年一二月、ベトナム北部カオ・パンの啓をボー・グエン・ザップが三四人のトラン・フン・ダオ小隊を指揮して攻撃する際に、ホー・チ・ミンは、①最初の行動は大きな影響力を持つ、かなりの範囲にわたつてグループの将来を決定するものであるから、戦闘は確実に勝利を収めなくてはならないこと、②行動の時と場所とを慎重に選ばなければならぬこと。この国の全土、さらに国外にまで反響を呼び起こすように行動は注意深く組織されねばならないこと、を強調しました。これらのことは全くそうだと思います。ホー・チ・ミンの強調したことは、いかにして人民を組織していくのかということ、人民の力によって戦いを勝利的に前進させていくことができるということを明らかにしているのです。

反日思想、反日武装闘争は、歴史的、現在の反革命的な存在である日帝本国人を革命主体へと転化促進していくものです。日帝本国人の歴史的現在のな責務として、日帝打倒——世界革命を戦取せんとするものです。そうである以上、我々は日帝本国人を、その歴史的、現在の反革命性、寄生虫性などを実践的に自己批判し、自己否定するように強力に促しつつ、反日戦線・陣営に組織していかなくては

なりません。こうした観点に立つならば、D作戦の失敗は明らかです。

☆ 反日をコトバや文字でのみ主張する者よりも、たとえ反日を主張しなくても、具体的に日帝と戦う人々の中にこそ、俺は共に戦っていく可能性を見たいと思っています。日帝本国たるオノレを自己否定し革命主体へとオノレを形成していくのは、何よりも日帝中枢を撃つ戦う事実行為の中にあるのです。

寒さにうち勝って、元気に健闘を。

(6) 78・12・8付

友へ！

☆ 日本人を丸ごと組織しようと考えているのか、というあなたの疑問に答えて。

あなたは、我々のD作戦の総括、そして三里塚闘争を主体的に担った一部諸君との共闘から、我々の反日思想・路線がアイマイになり、日本人を丸ごと組織しようとする一國主義的な日本人民共和国路線に拝跪しつつあるのではないかと懸念している訳ですが、そういうことはありません。しかし、我々は、反日勢力・陣営を絶対的な少数派であることに固定し、現在の反日を主張しない者あるいは反日の方向性を持たない闘いの全てを否定してしまうことは誤りであるとの立場を形成してきており、この点があなたの疑

性でした。

もちろん、我々は、我々の手で日帝のクソブタどもを全てセン滅したかったし、しなければならぬと決意していたから、戦いを継続していくための方策は講じようとしたし、クソブタ総セン滅の戦略、戦術は立てていました。しかし、それは厳密なものではなく、戦いの勝利を保障していくものではなかった訳です。我々にとっては、生きていく今をいかに戦うのかということ、そして休まずに戦い続けねばならないという義務感と責任感に強くプッシュされていたのです。

勝利の展望と確信を確固として有せず、オノレを絶対的少数派として固定化し、一億全てを敵に回してでもという我々（この傾向を、特に俺が強く持っていたことを自己批判しています。）が、被逮捕を戦いの終りと考え、敗北主義に金縛りになったのも必然であったと言えらると思います。我々は、我々の救援活動の存在を知った後でも、それは市民主義的な、あるいは一般的な救援運動としての救援活動であると考え、我々が担ってきた戦いとは関係ないものと切り離して考え、自己完結的に敗北し戦いの終結を意識し、自白してしまったのです。

（D作戦の失敗が自白に直結したというのは確かに間違いです。以上に書いたように、逮捕されたことによって戦いは終わったという敗北主義が根底にあり、そこから自白し

間になっっている理由だと思っています。我々のこの間の獄中―獄中―獄中の思想闘争によるこの立場の形成は、日帝を根底から打倒し尽し、世界革命に向かう勝利の展望と確信を不動のものとして獲得するためのものであり、自白敗北した我々が抱えていた矛盾を止揚せんとするものでした。

では、勝利に向かう確固とした展望と確信は、何を根拠として形成されるのだろうか？ それは、我々が担う戦いⅡ革命の質の問題での確信であり、同時に量の問題での確信であると思います。つまり、我々が勝利に至るプログラム、戦略・戦術を明確にすること、そして我々が絶対的な少数派であることを克服し、人民（もちろん、この内実は十分に厳密でなくてはなりません）を組織し、人民とともに戦い抜く現実性と具体性を有している時に、我々の勝利に向かう展望と確信は不動のものになるのだと思います。勝ち抜いていくための確固としたプログラムがなく、そして我々が絶対的少数派である限り、勝利することはできません。これは厳然たる事実です。

三部隊七名の自白は、共通して、勝利の展望と確信の欠如をその根底の原因としていたと思います。我々に共通していたことは、能書きばかりたれていても状況は一ミリも一センチも前進しないという判断のもとに、具体的な戦いを兎に角、緊急に開始しなければならぬという思想と感

てD作戦の失敗を明らかにする、という誤りを犯してしまつたのです。従って、D作戦の失敗を総括し得なかつたことが、逮捕されたという敗北感を助長していったというのが正しいと思います。）

我々はこの間、勝利の展望と確信を確固とするべく、つまり勝利に至るプログラム―戦略・戦術を明確にするべく考えてきました。我々の総括パンフ（廃刊号（上）、（下））は、未だ十分には展開できていませんが、我々のこうした問題意識は萌芽的にでも提出できていると思います。また、獄中同志間での、戦略をめぐる討論は、主に過渡期社会論、権力奪取概念などに関して行なわれており、更に考え抜いて、確固としたものにしていかねばならないと思っています。

それから我々がこの間考えてきたことは、我々が絶対的少数派であることを克服して人民を組織し、まさに勝利し得る革命戦争としての人民戦争を担っていくために要請されていることに關してです。つまり、人民戦争である反日武装闘争を担う主体は誰なのか？ 革命主体の水源地は何処なのか？ ということです。

反日武装闘争の主体は、日本人プロレタリア、農民の中から生まれるのでなければなりません。彼らが、日帝本国人として歴史的、現代的な反革命性、寄生虫性などを実践的に自己批判し、自己否定していくという主体的・政治的

な決意をすることによって、反日兵士へと成長し、反日武装闘争を主体的に担い、反日勢力の拡大、反日武装闘争の前進を保障していくのだと思います。従って、我々の戦闘、政治宣伝（我々は政治宣伝の重要性を否定してはいません。この重要性は十分に認識しています。しかし、我々が政治宣伝の重要性を声高に主張しないのは、政治宣伝が戦闘と一体のものとして、あるいは戦闘を補完するものとしてあることによって力を発揮するのであって、戦闘がないのに政治宣伝だけが行なわれても無力だと考えているからです。）は、日本人プロレタリア、農民に反日の主体的、政治的な決意を促すように的確に組織されなければなりません。反日の大義・道義性を、反日武装闘争の勝利性を、そして人民性を、つき出していくことによって反日兵士の誕生を促し、反日勢力・戦線を拡大し、強化していくのです。我々は、「日本人丸ごと」をオルグしようなどとは考えてはいないし、できるはずもないのですが、日本人プロレタリア、農民の中の良心派、戦闘派の部分に対しては強力に働きかけて、組織化する必要があると考えています。

反日思想は、反革命的存在の日本本国人を革命的存在へと転化し、革命主体へと成長させていく革命思想です（それ故、普遍性を有した革命思想なのです）。我々は反日思想に基く反日武装闘争の展開によって、日本本国人の中から、日帝を根底から打倒し尽すための、圧倒的多くの反日

兵士を獲得し、反日勢力・戦線を拡大し形成していかなくてはならないのです。

D作戦がなぜ失敗であったのかは、以上のことから明らかになると思います。D作戦は極めて少数の既に反日思想を獲得した（あるいはしつづける）人々からは、反日武装闘争の狼火として受け止められたのですが、圧倒的多数の日本人プロレタリア、農民からはD作戦の道義性、大義性は一部で認められつつも拒絶されてしまいました。反日武装闘争の本格的な開始期であっただけに、このマイナスは大きなものでした。（オノレの主体性を問わない無責任な支持表明はありましたけどね。）

KT作戦の方向と質をもった反日武装闘争の遂行によって、D作戦の失敗とマイナス面は克服されると確信していますし、何が何でも克服しなければなりません。

☆ 年末から年始にかけて懲罰を執行されるので、現在集中的に時間を活用してあわただしく生活しています。同志たちは闘志一杯闘い抜いています。

ではまた、健闘を。

(7) 78・12・16付

友へ！

☆ 今、俺の胸の中も頭の中も、とても穏やかではありません。悶々とし、ジリジリとしていて、もしクソブタども

が今俺に嫌がらせなり、挑発なりをしてきたら、かみついてやるであろう程に怒り猛っています。

なぜ、獄外では沈黙しているのでしょうか？ エルサルバドルのFARNの五月の戦闘から既に半年が経過しているというのに、なぜ、誰一人具体的に応えようとはしないのでしょうか？ イラン人民の戦いにもなぜ、沈黙で応えているのでしょうか？

確かに、文書では、コトバとしてイラン人民への「連帯」だの、「戦闘に学ぶ」だのが見られますが、ただそれだけです。この国では具体的に、直接露骨に殺人や爆破を煽るのでもない限り、文書にし、コトバを吐くことは、何ものも犠牲にすることなく、何一つ日常性を変えることなくできるのです。コトバで「連帯」だの「戦闘に学ぶ」だのと言うことは、文字さえ書けるのであれば、この国では全く簡単なことなのです。一〇〇万回「連帯」を叫び、一〇〇万回「戦闘に学ぶ」ことを強調してみても、そんなものはクソの力にもならないのです。

反日武装闘争は慎重に準備する必要があり、先達たちの敗北の教訓を絶対に生かききって、持続的に戦い抜くようにしなければなりません。反日武装闘争（反日都市ゲリラ戦）と実力闘争とは全ゆる面の違いがありますから、反日都市ゲリラ戦を開始するには、従来の実力闘争を担った当時の発想を転換することを強く求められています。日常生活

活の全てにわたって、公然活動を担ってきた時とは異なる、非公然非法活動のための体制作り、そのための配慮の徹底が要求されます。従って、安易な準備では、反日武装闘争は決して持続的に戦い抜けないものです。だがしかし、反日武装闘争（反日都市ゲリラ戦）を担うための準備とは、理論の構築ということではなく、準備という実践なのです。準備という戦闘を経て初めて戦い抜く力をつけられるのです。

反日武装闘争（反日都市ゲリラ戦）の正当性や必要性を認識し、戦う決意を強く持つていても、それだけでは反日武装闘争を担っていくことはできません。身体の内奥から湧き起る戦闘的パッションが必要なのです。一步踏み出すという決断が必要なのです。エル・サルバドル人民、イラン人民……の戦闘に感応せんとするパッションが絶対に必要なのです。

東アジア反日武装戦線三部隊による反日武装闘争の連続的な遂行以前に、（正確には一九七四年八月三〇日以前ですが）、俺は多くの友人を持ていました。友人たちは俺よりも年をくつた者も若い者もいましたが、みな頭の中では反日武装闘争（反日都市ゲリラ戦）の正当性と必要性を認識し、決意までしていた友もいたのです。しかし、そのほとんどが、一步を踏み出せずに、沈没しました。一步を踏み出すということ、すなわち、敢然として反日武装闘争

（反日都市ゲリラ戦）を開始するための具体的な準備を、開始すべき時に開始しなかったが故に、彼らは沈没してしまったのです。

今、三井物産、東レ、蝶理などに対して、なぜモロトフ・カクテル一本すら投げ込まれないのでしょうか？ 今の沈黙状況は、反日武装闘争派、世界革命派の最低限の道義性すら何ら戦われていないということです。五月から七ヶ月を経てのFARNからの再度のつきつけに対して、反日武装闘争派、世界革命派を自称する者は、絶対に沈黙しては駄目です。何をおいても、FARNからのつきつけに応えきれなければなりません。

俺は今、止むに止まれぬ気持ちから、獄外の友人全てに不信を露わにして苦言を呈しているのですが、俺の不信と苦言に対して、獄外の友人たちが、具体的な戦闘行動によって、俺を批判して欲しいと強く希望しています。いや、俺は、そうした日帝中枢を撃つ具体的な戦闘による俺への批判しか望んでいないのです。

東アジア反日武装戦線KF部隊（準）兵士 P

FARNの「戦闘指示」に応えよう

中米エル・サルバドルでのFARN（民族抵抗武装軍）の多国籍侵略企業（の重役に対する連統的な捕捉作戦は、反世界帝国主義の戦いをおし進めている全世界の被支配人民の戦闘意志を鼓舞している。

「サルバドルのゲリラ頑張れ」と^{12/5}付の「たたかいの中から」に掲載された東京のO君も、俺と同じようにFARNの戦闘をしつかりと受け止めたのだと俺は思っている。だがしかし、日帝本国人である我々は、「ゲリラ頑張れ」とコトバでいうことはできない。何故なら、我々は、帝国主義本国人と被植民地人民との間には、総体として支配・被支配、収奪・被収奪の関係が厳然としてあるが故に、今年5月、12月の日帝侵略企業の代表と重役に対する連統的な捕捉作戦は、エル・サルバドル人民をロメロ軍事政権と結託して支配し、収奪している日帝総体に対する攻撃であり、日帝本国人である我々に対するつきつけの戦闘指示であることを確認するからである。我々は日帝本国人として、エル・サルバドル人民をはじめとする被植民地人民に敵対し続けるのか、それとも日帝侵略企業、機関、帝国主義者どもをセンズする事実行為で、オノレの歴史的、現在の反革命性を自己否定して、被植民地人民と言葉の真の意味での連帯をするのかが厳しく問われているのである。「ゲリラ頑張れ」とコトバでいうのではなく、三井物産、東レ、蝶理などを、日帝本国において武装攻撃する事実行為で、FARNの「戦闘指示」に応えるか否かが問われているのである。日帝侵略企業、機関、帝国主義者どもを武装攻撃せず、放置しておくことは、我々の主観的意図が何であれ、我々が被植民地人民に対する支配と収奪に荷担すること、すなわち我々が日常的に被植民地人民と敵対することを意味しているのである。

日帝本国の左翼を自認する者、そして世界革命を追求せんとする革命家は、速やかにFARNの「戦闘指示」に応える責務を負っている。エル・サルバドルの、イランの、南朝鮮の、そして全世界における反世界帝国主義の、反日帝の戦いに、日帝の政治、経済、軍事中枢に対する具体的な武装攻撃で応えよう！

被植民地人民の戦いに呼応する志と、日帝本人としての歴史的、現在の反革命性を日帝中枢を武装攻撃する事実行為で自己否定し、世界革命の主体へと形成していく反日の大義をもって、ただちに非公然体制を整え、戦闘配置につき、戦闘を開始しよう！東京のO君、一切の待機主義、日和見主義を排して、共に戦おう！

一九七八年二月一六日

東 拘 在 監

大 道 寺 将 司

(本文は、「人民新聞」1979年2月5日号に掲載されたものです。)